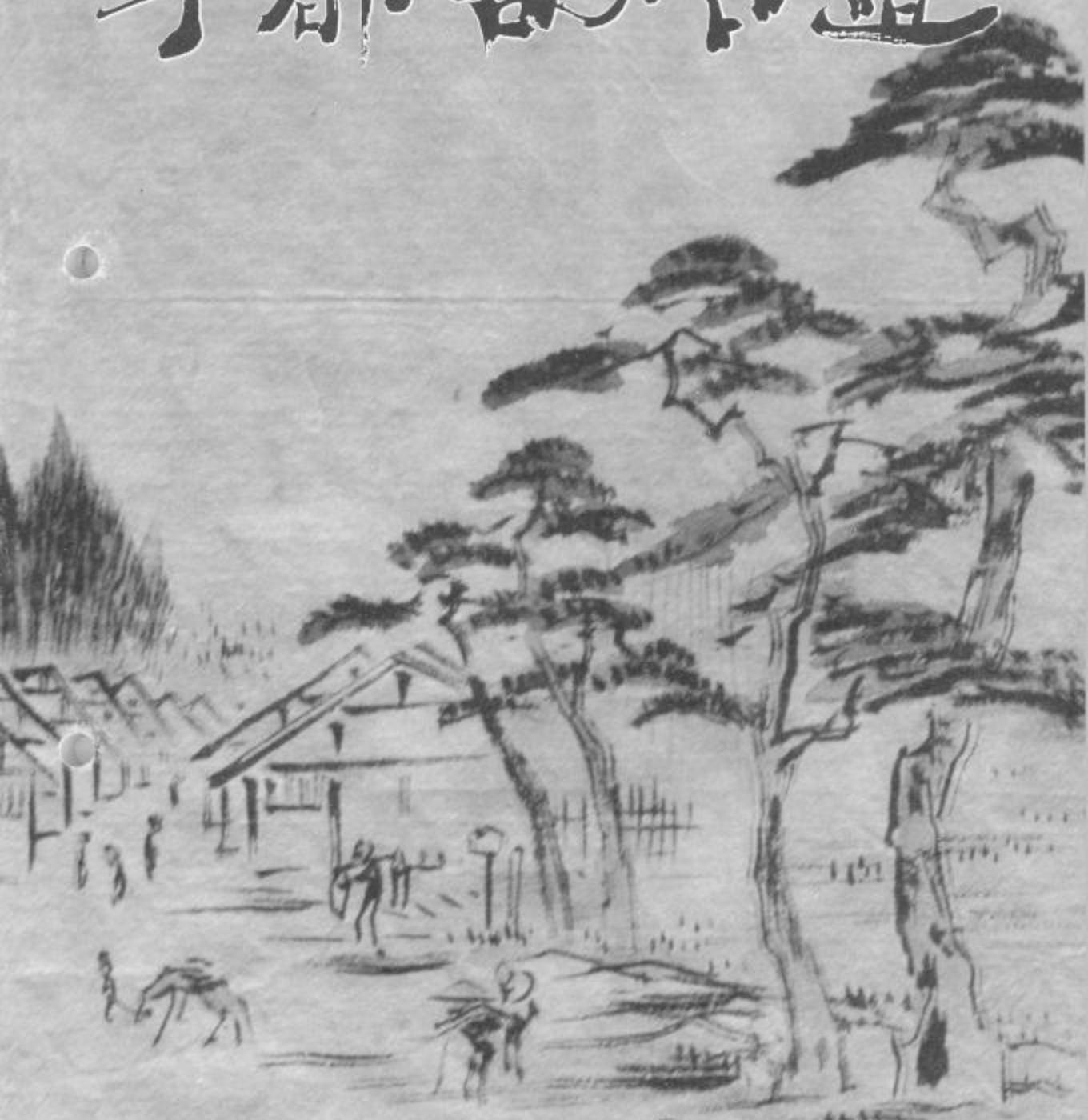


日光海
新田町入

宇都宮古道



宇都宮市教育委員会

表 紙

『宇陽略記』より

宇都宮市大通り5-2-10

高橋節子氏所蔵

文化財シリーズ第8号

宇都宮の古道

昭和60年3月

宇都宮市教育委員会



中徳次郎の宿—日光街道—(徳次郎町)



村はずれにある薬師道(東木代町)



大谷寺の千手観音(大谷町)



宇都宮城本丸跡(本丸町)



坂の上の地蔵尊(道場宿町)



上小池の杉並木-日光街道-(上小池町)

序 文

文化財シリーズ第8号「宇都宮の古道」をおとどけします。

わが郷土、宇都宮は古代から下つ毛の国の中心として栄えてきたまちです。本市の今日に至るまでの共通した特色の一つとして各時代において常に陸上交通の要所としての地位を保ってきたことがあげられると思います。

具体的に申しますと、古代は蝦夷討征の拠点、中世においては東北への出入口、近世では江戸幕府が定めた五街道のうち日光・奥州両道が分かれる場所であったことなどがあげられます。

本市がこのように古来から交通の要所にあったことは、今日の市民性の最大の長所である“どこからやってきた人に対しても、分け隔てせず親切に迎える”という開放的性格を生みました。これは、一朝一夕に根付いたものではなく、いわば歴史の中で“陸の港町”のような位置にあった本市の特性から自然に芽ばえてきたものなのです。極言するならば、この誇るべき長所は「道」が与えてくれたものといえるのではないのでしょうか。

現代に生きる私達は、この事実をしっかりと胸に刻み、伝統を受け継ぐだけでなく、更にこの長所を伸ばしていきたいと思えます。これは、本冊子を発刊した大きな目的の一つですので、どうか多くの市民の皆様の目にとまり、私達のまち「宇都宮」をより深く理解していただき、一層愛着を寄せていただくための一助となれば幸いと存じます。

終わりに、本冊子の刊行に際して調査にあたっていただいた本市文化財調査員の方々をはじめとして、御協力くださいました関係各位に心から感謝の意を表します。

昭和60年3月

宇都宮市教育委員会

教育長 後 藤 一 雄

目 次

序 文	
まえがき	1
1 古道のとらえ方	2
2 古代の東山道	4
3 中世の鎌倉街道	7
4 近世の道	
(1) 城下の道	10
(2) 奥州街道	17
(3) 日光街道	22
(4) 脇道	
① 石井道	38
② 道場宿道	41
③ 真岡道	44
④ 上三川道	46
⑤ 鹿沼道	50
⑥ 佐野道	56
⑦ 駒生道	59
⑧ 文挾道	60
⑨ 新里道	62
⑩ 大網道	64
⑪ 篠井道	66
⑫ 羽黒道	68
⑬ 砂田道	73
⑭ 長岡・川俣道	74
⑮ 平出道	76
⑯ 市兵衛道	77
⑰ たつ街道	78
(5) 城道	
① 根古屋城への道	82
② 飛山城への道	83
(6) 信仰の道	84
① 大谷観音への道	84
② 多気不動尊への道	86
③ 安産稲荷への道	89
④ 御岳神社への道	90
⑤ 成願寺への道	91
⑥ 茂原観音への道	92
あとがき	93

まえがき

本冊子は、昭和58年度に宇都宮市教育委員会が、市文化財保護審議委員会の答申を受け市文化財調査員活動の一環として実施した「古道調査（課題別文化財一斉調査）」の結果をもとにしてまとめたものです。

同調査は、市内全域を対象にして実施した結果、56件が報告されました。

しかし、20名の調査員の「古道」に対する基準がそれぞれ異なることから本冊子への掲載にあたっては、事務局（市教育委員会社会教育課）職員が調整するとともに報告になかったものも一部収録しました。

また、報告されたもので本冊子の本編に収録しなかったものについては「1. 古道のとらえ方」の中に参考資料として掲載しました。

なお、「古道調査」は、次の組織で行いましたが、特に松本尊弘、細谷邦夫、増淵オイ、沼子キミ、吉川リエ、本多晃の各氏の協力を得ました。

※ 本文中、古道のルートを示した地形図の縮尺は全て2万5千分の1です。

●宇都宮市文化財保護審議委員会委員

- | | | |
|------------|------------|-----------|
| ○野中退蔵(委員長) | 雨宮義人(副委員長) | 岩崎良能(委員) |
| 森谷憲(委員) | ○富祐次(委員) | 谷田部康幸(委員) |
| 塙静夫(委員) | 阿久津浩(委員) | 小堀時蔵(委員) |
| 戸田博亘(委員) | | |

●宇都宮市文化財調査員

- | | | |
|------------------------------|---------------------------|-----------------------------|
| ○黒川孝三(一条) | 塚田宗雄(陽北) | 加藤康熙(旭) ^{59. 9退} |
| 内藤二郎(陽南) | 石川秀男(陽西) | 釜井宗一(星が丘) ^{59. 9退} |
| 松本文一郎(陽東) | 平塚良雄(泉が丘) | 糸川弘明(宮の原) |
| 菊池正仁(平石) | 田中親明(清原) | 増淵藤四郎(横川) |
| 坂寄悦男(瑞穂野) | 小林哲夫(豊郷) | 半田勝(国本) ^{59. 3退} |
| 高山伝治(城山) | 福田操(富屋) | ○阿久津義正(篠井) |
| 松本笑悦(姿川) | 小島豪市郎(雀宮) | 酒井光一(旭) ^{59. 10新} |
| 高藤常松(星が丘) ^{59. 10新} | 小塚博(国本) ^{59. 4新} | |

●宇都宮市教育委員会社会教育課職員

- | | | |
|--------------|--------------|--------------|
| 加藤悦男(社会教育課長) | ○小林錦一(文化財課長) | ○定岡明義(文化財課係) |
| ○手塚英男(文化財課係) | ○梁木誠(文化財課係) | 阿部信弘(文化財課係) |
| 吉澤洋子(文化財課係) | 山中洋子(文化財課係) | |

○印＝企画編集(◎主任)

1. 古道のとらえかた

本書は、宇都宮市文化財調査員活動の一環として実施している「昭和58年度課題別文化財一斉調査」のテーマ『宇都宮の古道調査』の結果を中心にまとめたものであり、調査要領は次のとおりである。

〈古道調査要領〉

1 目的

古くから人々の生活に不可欠であった道は、その土地の人々の歴史を刻み、その時代を生きた人々に多くの恵みを与えてきた。

しかし、これらの道は、常に人々の生活と一体をなしてきたために社会や生活の変化によって、失われ、忘れ去られようとしている道も少なくない。

そこで、本年度は、失われつつある古道を総合的に調査し、記録保存する。

2 調査対象

古道とそれに関する歴史的事物を調査する。

(1) 古道

ア 特別な呼称のある道

イ いわれのある道

(2) 歴史的事物

町並み(宿場)、石仏、道標、一里塚、塚、並木、河岸、神社、仏閣、地名、古地図、伝説、城館跡等

3 調査方法

(1) 調査

調査は、実際に現地において路線等を確認のうえ行うものとするが、聞き取り調査等も活用する。

(2) まとめ

別添「調査用紙」に調査結果を記入するとともに、その路線、所在地を1/25,000の地図に明示する。

(3) 調査地区

調査地区は、原則として、調査員

昭和58年度課題別文化財一斉調査 古道調査		調査用紙	整理番号
古道名	起点～終点	～	調査地
古道の 略称 図と 具体的 事柄			
古 道 の 出 発 地			
古 道 の 景 観 写 真			
調査文献の 目録等			調査者

の担当区域内とする。

ただし、路線が隣接区域にまたがる場合は、隣接の担当調査員と連絡・調整のうえ調査を進めるものとする。

上記要領により古道調査を実施したが、調査以前から古道をどの範囲でとらえるか、いつごろまでの道を古道とするかなど次のような問題点が指摘されていた。

- 時期（時代）的に、古道をいつまでにおさえるか。
- 改修・整備をした古道の取り扱いをどうするか。
- 古道として伝承されていても、正確なルートをつかめるか。
- 狭い地域（旧大字単位）に残る生活道の取り扱いをどうするか。
- 同じ道であっても、地区によって違う名称をどうするか。
- 軌道敷跡・軍道等の取り扱いをどうするか。

これらの問題点については、調査員の判断にゆだねるといえば棚上げした状況で調査に踏み切った。その結果、調査員から提出された調査内容は当然の事ながら統一性を欠くものであった。そこで、本書の作成に当たっては、およそ次の掲載基準により編集することとした。

- 本書で取り扱う古道は、江戸時代以前までに敷設されたものとする。
- 近代的に改修・整備された古道であっても、著名なものは掲載する。
- 狭い地域内の古道であっても、歴史的意義があるものは掲載する。
- 調査結果に加えて、書籍、文献等を参考にして解説を記述する。

なお、調査員から報告がありながら、本書に未掲載の古道は次のとおりである。

番号	古道名	起点～終点	調査地	番号	古道名	起点～終点	調査地
1	新地街道	NHK支局～河原町	旭	8	ト口道	徳次郎～材木町	富屋
2	長岡脇道	長岡町	豊郷	9	栃木道	上欠町～栃木	姿川
3	日光街道(中道)	金沢～田野天王原	城山	10	元砥上駅の交通路	砥上駅～宇都宮	◇
4	結城街道	下福岡～古賀志	◇	11	戸長役場道	小川家～ [■] 田・上砥上 下欠・下砥上	◇
5	辰街道	野尻	◇	12	名主道	植木家～砥上・下砥上	◇
6	宇都宮軌道運輸と 人車鉄道	宇都宮～城山	◇	13	成願寺道	さるやま町～成願寺	横川
7	大谷道	徳次郎～大谷	富屋	14	清原飛行場引込線	宝積寺～清原	清原

2. 古代の東山道

我が国の道路は、律令国家成立以前にもある程度できあがっていたことは、古墳や集落跡等の遺跡の分布状態によって推測することができる。

しかし、全国的な規模で本格的な道路が整備されたのは、中央集権的な律令国家の事業としてであった。中央集権国家の確立をめざす大和朝廷にとって、都と地方を結ぶ道路の整備は、役人をはじめとする人々の往来、税や産物等の物資の輸送、軍団兵士の移動等のため不可欠な条件であった。そこで、大和朝廷は、都を中心として五畿七道を定め、地方の諸国を7つに区分した。

下野国は七道のうちの東山道に属し、蝦夷の征討と奥羽の開拓が律令政府の大きな関心事であったため、政治的・軍事的に重要な意味をもつ道であった。

以下、『うつのみやの歴史—昭和59年・宇都宮市—』の「東山道と衣川駅家」の記事を転載してみる。

「東山道は上野国の新田駅家（太田市）から下野国の足利駅家（足利市十念寺跡附近か）に入ると、これから東進して三鴨駅家（岩舟町壘岡附近か）に達し、ここから下野国府（栃木市田村町）に至り、思川を渡って下野国分寺・国分尼寺（国分寺町）附近を通過し、下野薬師寺（南河内町）まで北東進し、これから北進して田部駅家（上三川町多功附近）に至る。田部は田郡の誤記と思われ、田郡が多功に転化したのではなかろうか。東山道は田



8～9世紀の東山道（『宇都宮市史』第1巻より）

部駅家から北上し、多功廃寺（上三川町多功河内郡衙か）の近くを通過して上神主廃寺（上三川町上神主と宇都宮市茂原町との境）に達するが、茂原町内には愛宕塚古墳・大日塚古墳・権現山古墳などが群在する。この辺りから北東進して田川を渡って東谷町内の笹塚古墳に至り、さらに刑部郷（『和名類聚抄』記載の郷名）近くを経て衣川駅家に至ったと思われる。（中略）

そこで衣川駅家の位置を、石井町の志峰寮東遺跡に想定してみたい。ここは宇都宮大学の南東約1.5キロの地である。この辺りは今はすっかり住宅地と化しているが、わずかに残る畑地には、奈良・平安時代の土器（土師器）片が散乱している。石井町内にはこのこ



古代主要遺跡分布図（「角川日本地名大辞典」9 栃木県より）
上侍塚古墳・下侍塚古墳（湯津上村）の西側を通して、湯津上地内の磐上駅家に至り、さらに北進して黒川駅家（那須町）に達した。これから北東進して下野国から陸奥国に至った。」

ろの土師器片を広い範囲にわたって出土する遺跡はほかにない。そればかりか、石井町内には浅間山古墳・愛宕塚古墳などを中心とした久部台古墳群があり、衣川駅家の位置を考えると、その歴史的環境は十分に整っているといえる。

そこで東山道はこの衣川駅家から東進し、下川岸（鬼怒橋の南方約1キロ）辺りで鬼怒川を渡って鑑山に達し、清原中学校のすぐ西側を北進し、竹下浅間山古墳近くを通して板戸古墳附近に達した。この辺りから高根沢町石末を経て氏家町の八方口に至った。八方口の東方には鹿久保という地名があるので、この附近に新田駅家が考えられる。ここから小川町三輪の式内社三和神社を約て北進し、那須官衙（小川町）に

達し、浄法寺廃寺付近で箒川を渡り、



上神主廃寺出土古瓦



笹塚古墳(東谷町)



瑞穂野団地東側の道(石井町)



鬼怒川下川岸(石井町)



竹下浅間山古墳(竹下町)



板戸大塚古墳(板戸町)

